

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 久保田 智香

論 文 題 目

Factor Structure of the Japanese Version of the Edinburgh
Postnatal Depression Scale in the Postpartum Period

(日本語版エジンバラ産後うつ病自己評価票の因子構造に関する検討)

論文審査担当者

名古屋大学教授

主 査 委 員

小川 豊昭



名古屋大学教授

委 員

本城 秀次



名古屋大学教授

委 員

吉川 史隆



名古屋大学教授

指導教授

尾崎 公之



論文審査の結果の要旨

産後うつ病の発症率は約10%に及ぶ。そこで、エジンバラ産後うつ病自己評価表 (The Edinburgh Postnatal Depression Scale; 以下、EPDS) は産後うつ病のスクリーニングツールとして国際的に広く普及している。今回、我々は、未だ検討されていない日本語版EPDSにおける因子構造を調査した。探索的因子分析・確認的因子分析の結果、不安因子・快感喪失因子・抑うつ因子の3因子構造であることが判明した。





本研究に対し、以下の点を議論した。

1. EPDSは、ゴールドバーグの健康調査票における抑うつ症状の質問項目に基づいて作成された10項目4検法の質問紙であり、各国語版での信頼性・妥当性が確認されている。しかしながら、産後うつ病のスクリーニングにおける各質問項目の必要性は十分に吟味されておらず、英語版では因子寄与率の高い項目のみでの短縮版の有用性も主張されている。本研究では、日本語版EPDSにおいて不安因子が高い寄与率を持つ一方、どの因子にも属さない質問項目 (自傷念慮に関する質問) も認めた。これらは今後、必要十分な質問項目を検討する上で意義のある結果といえよう。
2. 因子構造の解明により産後うつ病の症候学的特徴が明らかになり、各症状の経過推移の把握が可能となる。本研究においては、不安因子の寄与率の高さから不安症状が産後うつ病に大きく関与するということが判明した。また、不安因子と抑うつ因子の因子間相関の高さから、不安症状と抑うつ症状には強い関連があるということが判明した。また、快感喪失因子は比較的独立した因子として存在することから、快感喪失症状を呈する背景には、抑うつ症状・不安症状とは異なる要因が関与する可能性が示唆された。
3. 現在、この結果を元に、妊娠期におけるEPDSの使用に関して調査を施行したところ、妊娠前期・妊娠後期の各時点で施行したEPDSにおいても不安因子・快感喪失因子1・抑うつ因子の3因子構造が高い適合度を持つことが確認できている。これにより、日本語版EPDSの因子構造は時点依存性が低く、妊娠期から産後において利用する上で十分な妥当性を持つ質問紙であると考えられる。

以上の理由により、本研究は博士(医学)の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

別紙2

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※甲第	号	氏名	久保田 智香
試験担当者	主査 小川豊昭  本城秀次  吉川史隆  指導教授 ノムラトシ子 			

(試験の結果の要旨)

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

1. 日本語版 EPDS における各質問項目の意義について
2. 因子構造から考えられる産後うつ病の症候学的特徴について
3. 妊娠期から産後における因子構造の時点依存性について

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、精神医学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。